



「こしらえる」喜び

副校長 平島 幸江

令和3年もあっという間に最終月です。最近朝晩気温の低下で校庭下の畑には霜が降りる日もありますが、校庭側から覗くと朝の陽光に照らされた畑の霜はキラキラとイルミネーションのように光り大変きれいです。季節と共に変わる朝の巡回の景色は変わらず日々の楽しみです。

さて、先日5年児童と神奈川県立愛川ふれあいの村へ宿泊体験学習に行ってきました。5年生児童にとっては初めて、教職員にとってもたいへん久しぶりの宿泊行事でしたのでちょっぴり緊張しながらの出発となりました。しかし、愛川町の美しい紅葉の中でかわいい動物とのふれあいや藍染体験、温かい食事をいただくうち徐々にほぐれ、大変充実した二日間を過ごすことができました。村を離れるときには「もっと泊まりたかったな。」「一か月くらい住みたかった。」という児童がいるほどでした。

特に二日間の中で、明らかに児童の表情が真剣さを増したなど感じた活動が朝の「シーツたたみ」です。愛川ふれあいの村のシーツは特別な寝袋のような形状をしている上にたたみ方がルールで決められています。さあ、活動です。説明を受けた後、真剣なまなざしで広間に広げたシーツを見つめてたたむイメージをもちました。まずふたつの隅を指先でつまみます。皺ができないようにそっと引き上げながら反対側の隅とあわせて半分に折った面を^{てのひら}掌で整えます。それをまた半分に折ることを4回繰り返してたたみ上げます。うまくいかない子は近くにいる子にヘルプを求め、2・3人で協働するとピンときれいにたためました。たたみ終えたものは宿泊棟入り口の集積場所まで崩れないように大切に携えて運んでいます。集積スペースでは回収業者の方が数えやすいように向きを揃えて重ねなくてはなりません。簡単にすまそうとする子は不思議とどこか間違えていて何回かやり直しの指示がでますが、あきらめる子はいません。どの子も一生懸命に取り組んでいました。それは一晩疲れた体を休ませてくれたシーツに感謝の心を伝えているかのような姿でした。

そんな児童のすがすがしい姿を目の前にして、「こしらえる」という言葉が浮かんできました。平戸の地域でこの言葉をよく使われる方がいらっしゃるので印象深く感じていた言葉です。「手を加えて美しく見えるようにする」「手を尽くして整える」というような意味があるそうですが、私のイメージでは「愛情込めて掌(たなごころ)にのせて丁寧に作っている」姿が思い浮かびます。ものづくりの原点だと思います。児童がシーツを整える活動は制作活動でこそありませんが、手の感触を使って整え「ものを大切に作る心」「こしらえる心」につながる重要な教育活動であったと感じています。シーツたたみを完了して担当教員から合格をもらった児童の嬉しそうな表情が忘れられません。自分で物事を「こしらえる」喜びをきっと体感してくれたと思います。

今月12月11日は、いよいよ本校創立50周年記念式典・祝賀会を開催いたします。児童が、愛情込めて学校を「こしらえて」くださった方々の思いや願いを知り、このよき平戸の伝統を受け継いでいこうとする心を育てるよう取り組んでいきたいと考えております。